

---

# 恋に落ちたら

ゲキガンガー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋に落ちたら

### 【Nコード】

N8915Z

### 【作者名】

ゲキガンガー

### 【あらすじ】

男性恐怖症の萩原雪歩に、恋愛ドラマのヒロイン役が回ってきた。しかし、このままでは無事にドラマの収録を終える事はできない。その男性恐怖症を治す為に、プロデューサーは雪歩とデートをする事になるのだが、事態はよからぬ方向に。

## 恋に落ちたら前編（前書き）

なんていうか、前回の反省を踏まえて、原作調で。とはいえ、アニメ位しかまともなアイマス知らないのですが。  
お楽しみ頂ければ幸いです。

## 恋に落ちたら前編

アイマスSS 『恋に落ちたら』 作ゲキガンガー

プロローグ。

恋に落ちたら、私もまた変われるのでしょうか。そんな事を最近、萩原雪歩はよく考えます。

「3、2、1」

カメラマンさんのカウントダウンが始まる。撮影場所は公園だった。全力疾走してきた私は、思い切り息を切らしている。

「はぁ……はぁ……」

「待てよ」

後ろから、追いかけていた男の人が、そう呼び止められる。

「お前俺の事嫌いなのかよ？」

「そうじゃない……そうじゃないけど」

「だったら何で逃げるんだよ」

あっ。

男の人の手が触れる。

我慢しなきゃなのに、体が、全身が震える。

顎に手を当てられる。実際に涙を流しているのは、演技でも何でもなく、怖くて涙があふれてきたのだ。ふえーん、怖いよお。

けど、男の人の顔が近づいてくる。

「俺は、こんなにお前の事が好きなのに」

顎に手を当てられた。気持ち悪い汗が浮かんでくる。我慢しなきゃなのに。

唇が触れる位、男の人の顔が近づいてきた。

ぶっん。

私の中の何かが切れた。

「き、きゃあああああああああああああああああああああ  
あ！」

「バチーン！」

私は、思い切りのピンタを放っていた。

961プロダクション事務所。高いビルのワンフロア自体が、961プロの事務所となっている。そこで、新聞を広げて読んでいる男がひとり。

『萩原雪歩、恋愛ドラマのヒロインに抜擢！』

芸能新聞の一面には、そうでかかど書かれていた。

「くだらん！ 実にくくだらん！ 高々弱小プロの分際で！」

961プロの社長、黒井社長は、新聞を読みつつ、そう言った。

「全く、何と目障りな事だ！ 765プロ！」

面白くなさそうに新聞を読み続ける。

「ん？」

『なお、調べによると萩原雪歩氏は、男性恐怖症を患っており、撮影は難航すると見られており、』

「ふふふ……待てよ。これはなかなか面白いネタじゃないか」

新聞を閉じ、テーブルに置く。

「見ているよ765プロ！ 目に物を見せてやるうじゃないか！」

はははは、ふっはっはっは！」

黒井社長は、窓から風景を見下ろしつつ、哄笑していた。

「……というわけで、撮影は中止。雪歩は落ち込んだじゃってるみたいで」

律子さんから俺は、話を聞いた。

「そうなんですか」

「さつきからそこで落ち込みっぱなしで」

律子さんは溜息を吐く。

雪歩は事務所の椅子に座り、同じように溜息をついて落ち込んで

いた。仕事のミスを嘆いているんだろう。

「どうして、私なんかが恋愛ドラマのヒロインに選ばれたんでしょうか。私なんかが選ばれるよりも、別の方が」

「そう落ち込むな雪歩」

「プロデューサー」

「お前は、ドラマの監督の目に止まったんだ。何でも、ヒロインのイメージに雪歩がぴったりだったらしくて。普通はオーディションで決まるような役を、オファーで得たんだ」

「けど、そんな私のせいでドラマの撮影が中止になって、撮影が送られて、他のスタッフにも大変な迷惑をかけて。本当、今すぐにも穴を掘って埋まりたい気分です」

「……頼むから、事務所に穴を掘るのはやめてくれよな」

「……はい」

それでも雪歩は落ち込んでいる様子だった。故郷村でのライブから、少しは男性恐怖症がマシになったようだが、それでも、恋愛ドラマのヒロインとなると勝手が違ったようだ。

「……けど、私、自信がありません。その私は、男の人が……その、怖いんです。プロデューサー、今回のドラマの件、今から御断りはできませんか？」

「できるわけないだろう、一度引き受けた仕事を。プロだったら、一度引き受けた仕事を投げ出すなんて持ったの他だ」

「そうですね」

「何とか、その恐怖症を無くす方向で考えてみよう。俺も最善をつくす」

「はい！」

「頑張ろうな雪歩」

俺は雪歩の手を握った。数秒固まる。

「……き、きゃあああああ！」

悲鳴と共に、痛烈なビンタが放たれた。

「男性恐怖症ですか……」

「うーん。それを治すとなると、ちょっと難しいですね」

俺は律子さんと音無さん、二人に相談をした。二人もまた、頭を悩ませる。

「僕も、その事で必死なんですよ。雪歩は、その弱点さえなくなれば、きつとトップアイドルに駆け上がれる。その素質があると信じられています」

「そうですねー」

音無さんはしばらく考えた事、

「やっぱり、男の人に慣れさせるのが第一なんじゃないでしょうか？」

「男の人に慣れさせる？ 具体的に、どうすれば」

「……デートでもすればいいんじゃないでしょうか？」

音無さんは続ける。

「一日デートをして、雪歩ちゃんを男性に慣れさせるんです。そうすれば、少しはあの恐怖症も治るんじゃないでしょうか？」

「荒療治ですね……」

律子さんはそう言っていた。

「幸い、今回の撮影中止で雪歩には比較的時間の余裕があります。落ち込んでいる雪歩を励ます目的で、やってみるのには賛成です」

と、律子さん。

「けど、それを誰がやるんですか？」

「この事務所で男性で」

「しかも雪歩ちゃんが心を開いていて  
二人の目が俺に来る。」

「わかりました……俺がやります」

765プロには男性は二人しかいない。まさか、社長に任せるわけにもいかない。

「……その、雪歩、俺とデートをしないか？」

「でっ、でっ、デートですか？ 私がプロデューサーと？」  
随分と動揺した様子だった。

「べ、別に変な意味じゃない。雪歩の男性恐怖症を治すにはどうすればいいのか、律子さんと音無さんと話あって考えたんだ。ほら、雪歩の恐怖症は、大分軽減されてはきているだろう。前は俺を見るだけでも悲鳴をあげていたのに……」

「はい……それはもう、慣れましたから」

「だったら、これからもっとマシになって、ドラマのヒロインも無事に演じる事ができるようになるかもしれない。だから、もっと慣れる為に、俺と一日デートしてみないか？」

「それで、その、でっ、デートですか」

雪歩は緊張した様子だった

「俺じゃ力不足かもしれないけど、とにかく、少しでも男に慣れておかないと、今回の撮影を乗り切れない」

「そうですね。その通りです」

「今度の日曜日、俺も休みで、雪歩も仕事は特に入っていないから大丈夫だ。だから、その時に俺とデートしよう。いいな、雪歩」

「はい！ わかりました。プロデューサー」

しかし困ったものだ。俺は、大学を卒業してこのプロダクションに入るまで、碌な恋愛経験がないのだ。デートなんて、記憶にある限りした事がない。

弱ったぞ。

「どうやって雪歩をエスコートしてやればいいのか、全く見当もつかない。」

「プロデューサーさん！」

元気に声をかけてきたのは、春香だった。

「どうしたんですか？ 随分落ち込んでいるみたいですけど」

「それが」

春香に聞いてみるのも一興かもしれない。



「あのさ、春香」

「はい」

「春香はデートに行くならどういったところに行ってみたい？」

「え？ で、で、デートですか？」

「何だか慌てた様子で訊き返してくる。持っていた湯呑茶碗を落としそうになる。」

「ああ。デートだ。行くとしたら、どんなところに行ってみたい？」

「……そ、そうですね……。子供っぽいと思うかもしれないけど、遊園地とか」

「遊園地？」

「それで、メリーゴーランドに乗って、二人で観覧車乗って、夜はイルミネーションを見るとか、もう、最高ですね。そんなところに好きな人と行けたら最高ですね」

「遊園地……か。俺は手帳にメモをしていた。」

「わかった。遊園地だな。考えておくよ」

「そのデート、いつ行くんですか？」

「ああ、今週の日曜日だ」

「今週の日曜日……わかりました。スケジュール調整しておきます」

「ん？ 春香、どうかしたか？」

「な、何でもありません。期待してますね」

「なぜか、春香は微笑んだ。」

「場所はどこなんですか？」

「場所は、765プロの下の、食堂。時間は、12時集合だ」

「プロデューサー」

「……千早か」

「次に会ったのは、千早だった。」

「どうしたんですか？ 随分と深刻そうな顔をされていますが」

「せっかくなので、千早にも聞いてみるか。そう俺は思い至った。」

「……実は、デートについて悩んでいる事があって」

「デート？」

千早は目を丸くする。そんなに驚く事だろうか。

「ああ。千早はどこか行ってみたいところとかあるか？ どこでもいい」

「……そうですね。プロデューサーがそうおっしゃるなら。今度コンサートがあるオペラ歌手の公演に行ってみたいですね。歌の勉強にもなりそうです」

「……なるほど、千早らしいな」

「おかしいですか？」

「いや、千早らしくとってでもいいと思うよ。真面目で誠実だ。歌に対しては特に」

「……そうですか」

「ありがとう。参考にしますよ」

「参考？」

千早は首を傾げていた。

「それで、そのデートはいつ行くつもりなんですか？」

「ああ。今週の日曜日だ」

「今週の日曜日ですね……」

「場所はどこなんですか？」

「ああ……この事務所の近くの」

千早はなぜかスケジュール帳を広げていた。

「ねえねえ、ハニー何だか深刻そうな顔してるの」

「美希」

次に会ったのは、美希だった。

「美希に相談すれば、きつと心がスーッと楽になるの  
そうだな。美希にも相談するか。」

「実はデートについて悩んでいるんだ」

「え？ デートなの？」

美希は、目を大きく見開かせた。

「ああ」

「……美希はその、別に、ハニーと行けば、どこでもそれだけで満足なの」

「……そうか？」

「シヨッピングでも、映画館でも！ どこでもいいの！ ハニーの行きたいところが、美希の行きたいところなの」

「何でもいいと」

俺は手帳にそうメモをした。メモする意味は見いだせなかった。

「うん！ そうなの！」

「わかった。考えとくよ」

「わかったの！」

美希はなぜか笑顔だった。

「それで、ハニーデートはいつ行くつもりなの？」

「ああ、それが今週の日曜日で 場所は」

「わかったの。美希、とっても楽しみにしてるの」

なぜか、美希は笑顔だった。

「待て！ 犬美！ ハム蔵！ 勝手にそっちに行くなー！」

「響」

次に会ったのは響だった。家族（ペットというのは相応しくない）の動物を追いかけている。

「ん？ どうしたんだプロデューサー。何だか浮かない顔をしてるぞ」

俺の顔を見るなり、響はそう言っていた。

「実は、デートについて悩んでいる事があって」

「ん？ デート？」

そうだ。響にも聞いておこう。

「響はどこか行きたいところとかあるか？」

「デート？ ……だったら響は、動物園に行きたいぞ！」

「動物園？」

「うん。動物達がいっぱいいて、とっても楽しいんだぞ！」

「動物園か、わかった」

俺はメモをする。

「それで、いつ行くんだ？」

「ああ、今週の日曜日に……場所は」

「わかった。なんくるないさー」

響は、なぜか笑顔でそう言った。

事務所で真は、少女漫画雑誌を読んでいた。

「なあ、真」

せつかくなので、真にも聞いてみよう。

「何ですか？ プロデューサー」

漫画雑誌から俺に目を移す真。

「ちよつと、聞いてみたい事があるんだけど」

「はい」

「真は、デートするなら、どんなところ行ってみたい？」

「で、デートですか？」

いきなり動揺したような表情になる真。

「ああ。どんなところでもいい？」

「僕はですね。行ってみたいところというより、憧れみたいなものはあります。それは、その、フリフリのドレス着て、女の子らしく扱われたいです。それで、王子様と、シンデレラみたいな一夜を

それが、僕のデートの理想です」

「なるほど……参考にするよ」

「……デート、いつ行くんですか？ プロデューサー」

「ん？ ああ。今週の日曜日だ」

「こ、今週の日曜日ですね！ わかりました！」

真はなぜか目を輝かせていた。

「あつ、プロデューサー！ どうしたんですか？」

事務所の調理場あたりにいたやよいは、俺に向かってそう聞いてきた。

「やよいか」

「なんだか深刻そうな顔していますう」

「そうだ。やよいにも聞いておこう。」

「どうしたんですかプロデューサー？」

「やよいは、デートするなら、どんなところに行きたい？」

「でで、デートですか？」

「ああ」

「その、デパートの試食品めぐりとか、本屋さんで雑誌を立ち読みとか、あんまりお金のかからないところに行きたいですう」

「映画館とか、遊園地はだめなのか？」

「そんなお金のかかるところ、人生で数える程しか行ってないです」

「そうか……参考にするよ」

俺はメモをする。

「それで、いつ行くんですか？」

「ああ。それが、今週の日曜日で 場所は」

「はい。わかりました。弟達の面倒は、長男に言っときますう」

やよいは笑顔で微笑んだ。

「どうしたんですか？ プロデューサーさん」

次に会ったのはあずささんだった。

「あずささん……」

「何だか、深刻そうな顔をされていますが。私でよかったら、相談に乗りますよ」

「実は、デートについて悩んでいます」

「はい？ デートですか？」

目を丸くするあずささん。

「はい。あずささんは、デートするならどんなところに行きたいで

すか？」

「そうですねえ……」

あずさんは頭を悩ませた後。

「私なら、占いに行きたいですねえ」

「占い？」

「ほら、私って占いが好きなんで。占いの館とかで、好きな人と運命を占う、なんて、ロマンチックな状況に憧れます」

「……なるほど」

俺はメモをした。

「それで、いつ行くんですか？」

「え？ はい。今週の日曜日に」

「……はい。わかりました。期待しておきますね」

あずさんは微笑んでいた。

「うーん」

まだ頭を悩ませている間の事だった。

「なに不景気な顔してるのよ？」

次に会ったのは伊織だった。

「伊織か」

「ふん！ プロデューサーがそんな不景気な顔してちゃ、事務所に仕事が入ってくるわけがないじゃない！」

顔をツンと、顔を背けさせる。

「……はは、そうだな、すまん」

「何か悩みでもあるわけ？」

「まあ、悩みと言えば悩みなんだが、なあ、伊織」

「なによ？」

「お前はデートに行くならどんな所に行ってみたい？」

「デ、デートですって？」

「ん？ どうしたんだ？」

伊織はなぜか頬を赤くしていた。

「あ、あんたがそんな事言いだすなんて、どういった心境の変化よ」

「何かおかしいか？」

「……別に」

「それで伊織は、デートするならどういうところに行ってみたい？」  
「高級レストラン、高級ホテルのてっぺんの夜景の見えるところで  
ワインを飲みながら、その日を過ごすの。なんてゴージャスセレブ  
かしら。ふふっ」

「ワインって、お前まだ未成年だろう。」

「なるほど、高級レストランに、夜景ね」

「俺はそれをメモする。」

「それで、そのデートっていつ行くのよ？」

「ああ、今度の日曜日だ」

「日曜ね。わかったわ」

「伊織はなぜか微笑んでいた。」

「どうかしたのですか？ プロデューサー」

「次に会ったのは貴音だった。」

「随分と顔色が優れませんが……何か悩み事でも？」

「はは……さつきからずっとそう声をかけられてるんだけど、俺っ  
てそんなに表情に出るようなタイプなのかな？」

「はい。そうなのでしょう」

「……実は今度デートをしようと思ってるんだが」

「はい。それで私に？」

「ああ……貴音はどこか行ってみたいところとかあるか？」

「そのような質問にはお答えできません」

「……そうか」

「ですが、私はラーメンは嫌いではありません。ラーメン屋なら、  
差ほど機嫌を損ねる事はないでしょう」

「なるほど、ラーメン屋か。」

「……って、しっかり答えてるじゃないか。」

「俺はメモをする。」

「わかった。参考にするよ」  
「それで、そのデートはいつ頃行く予定なのですか？」  
「ああつ、今度の日曜日だ」  
「日曜日ですね。わかりました」  
貴音はなぜか微笑んだ。

「ねえーねえー兄ちゃん」  
「真美と亜美と遊ぼうよー」  
次に会ったのは、亜美と真美だった。  
というより、後ろから抱きつかれたのだが。

「こら、亜美と真美　今俺は忙しいんだ」  
「忙しいってどういう事さ兄ちゃん。さっきからうんうん唸っているだけじゃないか」

「そんな事する位なら、亜美と真美とゲームして遊ぼうよー」  
前者は亜美、後者は真美の言だった。

……俺だってそうしたいのはやまやまなんだが、今はデートの事で頭が一杯なんだ。

ともかく、こうして会ったのだから、二人にも聞いておこう。

「なあ、亜美、真美」  
「なに兄ちゃん？」

二人は言葉を揃える。

「お前達は、デートするなら、どこがいい？」  
「デート？　兄ちゃんど？」

二人は言葉を揃える。

『亜美と真美は、ゲームセンターに行きたい』  
『ゲームセンター？　そんなところでいいの？』

「うん。それも最新鋭のゲーム機が置いてある、最新のゲームセンターで、ずっとゲームをするんだ！」

と、亜美。

「ねえねえ、兄ちゃん、つれてってよー」



と、真美。

「そうすれば亜美と真美、兄ちゃんのほっぺにちゅーくらいしてあげてもいいんだよ」

と、亜美と真美。

「あんまり大人をからかうな」

『それで、そのデートっていうのはいつ行くの、兄ちゃん？』

「ああ……今週の日曜日だ 場所は」

『今週の日曜だね。わかったよ、兄ちゃん』

なぜか、二人は口を揃えていた。

そうして、本番のデートの日がやってきた。

後編に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8915z/>

---

恋に落ちたら

2011年12月28日00時54分発行